

熟年結婚に見る 人生100年時代

熟年結婚が増えている

娯楽と研究を兼ねて、2020年に50周年を迎えた長寿番組『新婚さんいらっしゃい』（朝日放送テレビ）を欠かさず見るようにしている。初期の頃（1970年代）は、20歳代のカップルがほとんどで、文枝（当時三枝）師匠は、まず「見合いですか？恋愛ですか？」と尋ねていたのが印象に残っている。当時、結婚の約3分の1は見合い結婚だったのである。

近年は、様々なカップルが登場するようになってきている。国際結婚はもう当たり前、専業主夫カップル、20歳以上の年の差カップル、更にはフランスで結婚した同性カップルが登場したこともある。

その中で、2019年10月20日、92歳という新婚さんが出場した。ご覧になった方もいると思うが、結婚時女性90歳、男性70歳。

東京在住の当時82歳の女性が、地方で自給自足生活を営んでいる男性宅に押しかけ、8年同居した後、結婚に至ったというものだ。女性は再婚、男性は初婚で、長い間海外を放浪した後、高齢になり地元の山村に帰郷したとのことである（後に、NHKの『あしたも晴れ！人生レシピ』でもその結婚生活の様子が放映されていた）。

私の知り合いの中にも、一昨年、80代半ばで結婚した男性がいる。連れ合いの方を亡くして数年後、所属団体で知り合った70代半ばのこちらも配偶者と死別した女性にプロポーズしたとのことである。夫側は子どもに恵まれない一方、妻側は孫もいる中での再婚である。夫は（子の名字は妻の旧姓のままだが）跡継ぎができたみたいへん喜んでいて、では、現実に熟年結婚はどれくらい増えているのだろうか。

2000年と2015年の変化を見てみよう。何歳からを熟年結婚と呼ぶかは定まっ

【表1】60歳前後、75歳以上の婚姻数
()内は初婚数

	2000年	2015年
55～59歳	9,613人 (1,191人)	8,586人 (1,646人)
60～64歳	5,393人 (482人)	6,787人 (1,054人)
75歳以上	1,069人 (69人)	2,092人 (120人)
全婚姻件数	798,138組	635,156組

出典：厚生労働省『人口動態特殊報告』2017年版を基に作成。
※年齢別の人数は夫（男性）側の年齢で集計。

たものはないので、アラ還（アラウンド還暦）の結婚状況を「表1」に示す。55～59歳では多少減少しているが、それは、全体として婚姻件数が減る中で、基本となる男性人口が少なくなっただけである。全婚姻件数に占める割合は逆に高くなっている。60歳以降では、婚姻件数全体が大きく減る中で増えて



中央大学文学部 教授
山田 昌弘

。【やまだ・まさひろ】東京大学大学院修了。東京学芸大学教授を経て、2008年より現職。専門は家族社会学。パラサイトシングルその他、格差社会、婚活の名付け親でもある。近著に『日本の少子化対策はなぜ失敗したのか』（光文社新書）がある。



>>> 熟年結婚に見る人生100年時代

【表2】「アラ還」独身者の人数と構成の変化

単位 (人)

		未婚者 (未婚による 独身者)	離別者 (離別による 独身者)	死別者 (死別による 独身者)	計	
男性	55～ 59歳	2015年	60万7千	25万4千	5万	91万1千
		1990年	11万1千	10万8千	9万2千	31万1千
	60～ 64歳	2015年	55万2千	27万8千	10万1千	93万1千
		1990年	6万5千	7万1千	13万	26万6千
女性	55～ 59歳	2015年	31万2千	36万2千	17万5千	84万9千
		1990年	16万5千	16万9千	43万7千	77万1千
	60～ 64歳	2015年	26万5千	38万2千	35万3千	100万
		1990年	14万8千	14万6千	63万5千	92万9千

出典：国勢調査を基に作成

※千人未満四捨五入

いる。特に初婚人数は高齢層で大きく増えている。そして、75歳以降の結婚、初婚数ともに倍となっている。

表にはないが、結婚の中で再婚の占める割合も上昇している。1975年には、結婚約94万組のうち、夫婦のうちどちらかが再婚の組数は約12万組、割合にして12・7%であった。それに対し2015年には、結婚約64万組のうちどちらかが再婚は約17万組、26・8%を占め、結婚4組に1組以上が再婚者を含む結婚となっている。

熟年結婚増大の背景

熟年結婚が増えている背景には、中高年独身者の増大がある。独身者がどれくらい増えているかを、1990年と2015年の国勢調査のデータから見よう【表2】。

55～64歳男性で見ると、1990年の独身者数は、男性約58万人、女性約170万人だったのが、2015年には男性約184万人、女性約185万人に増えている。特に男性独身者の増大が著しく、女性とほぼ同水準となった。結婚は今のところ、男女で行うものだから、この年齢層で独身男女の数が増えているだけでなく、独身男女の数がほぼ一緒になったところに、熟年結婚の増大の背景がある。

詳しく見ていくと、長寿化の影響で、男女とも、独身者の中で死別の独身者の割合が大きく減ったことがわかる。特に男性の平均寿命の伸びによって、夫との死別で独身になる60代の女性は減りつつある。

一方、未婚者と離別者は大きく増えている。特に男性未婚者が著しく増大し、60代前半の男性未婚者は25年で約10倍になったことがわかる。男性は離別者についても増えているが、人数で見れば女性の離別者の増加の方が多く注目に値する。

中高年未婚者に男性が多く、離別者に女性が多いのは、男女の再婚率の違いに基づいている。離別別男性は、女性に比べ再婚

しやすい。何度も結婚する男性は、何度も結婚する女性より多いのだ。そのため、初婚女性が再婚男性に取られてしまうので、一度も結婚していない男性が多くなる。

中高年の未婚者、離婚者が増えている理由

死別者が減少したのは、平均寿命の伸びが原因である。また、死別者に女性が多いのも、女性は平均寿命が長く、夫婦の平均年齢差で男性が約3歳年上であることによる。

死別者が減少する一方、中高年の未婚者や離別者が増えているのが独身者増大の原因である。その状況と理由について見てみよう。

1975年くらいから男女とも未婚率の上昇が始まっている。特に男性の未婚率の上昇が著しい。2015年のデータでは、30～34歳の未婚率は、男性約47・1%、女性約34・6%まで上昇している。つまり、30代前半の男性の約半分、女性の約3分の1が未婚である。若者の未婚率の上昇に従って、中高年の未婚率も上昇し、50歳時点の未婚率は、男性22・4%、女性14・1%まで上昇した。この数字は、国勢調査の度が上がっている。

その最大の理由は、経済的な困難である。結婚に当たっては、経済的に安定した男性が選ばれやすい。それは、女性の社会進出が進んだとはいえまだ不十分であり、女性は収入が安定した男性を結婚相手に求める傾向が続いているからである。

1990年に60歳だった人（1930年生まれ）の結婚適齢期は、まさに経済の高度成長期に当たり、若い男性はほとんどみな正社員か自営業の跡継ぎとして、安定した収入を稼ぎ出していた。そのため、この世代の50歳時点での未婚率は、男性2%、女性4%程度とたいへん低かった（女性の未婚率の方が高いのは、戦争でその上の世代の男性数が少なくなったのが原因である）。

経済の低成長期に入り、男性の収入の伸びが少なくなると、未婚率の上昇が始まり、1990年頃から非正規雇用が広がる。2015年に60歳だった人は、1955年生まれである。適齢期には、まだまだ非正規雇用は少ないとはいえ、徐々に未婚率が高まる。その後、就職氷河期と言われる1975年生まれ以降の世代では、収入が不安定な男性が増えて、今後、未婚率の更なる上昇が見込まれる。

そう考えていくと、中高年の未婚男性は、既婚男性に比べ、平均的に見れば収入が少ない傾向がある。この点をまず押さえておく必要がある。

続いて離婚率の上昇を見てみよう。離婚率も未婚率と同じく、高度成長期には少なかったものの、オイルショック後の1975年以降上昇する。バブル経済期に多少減少するが、バブル経済の崩壊と共にまた急上昇する。単純に件数を見ていくと、2000年以降は減少傾向にあるが、結婚も減少しているので、**結婚3組に離婚1組**

という割合は、ここ20年定着している。だいたい、近年結婚した夫婦は、3分の1の確率で離婚する。

ただ、「熟年離婚」が増えているとはいえ、離婚の大多数は結婚後10年未満に起きる。40代の離婚率は毎年1%。つまり、40歳までに結婚していた人のだいたい1割が、40代で離婚している計算になる。50代は毎年約0.5%なので、50歳時点での既婚者で5%程度が60歳までに離婚、60代は年0.2%程度なので、60歳時点の既婚者で70歳までに離婚する割合は、100人に2人程度である。

つまり、40歳時点で結婚していた人で70歳までに離婚する割合は、約17%ということになる。だいたい6〜7組に1組である。この数字を大きいと見るか、小さいと見るかは意見が分かれよう。熟年離婚は、増えていくと言われているほど、大きいものではない。**高齢の離別者は、若い時に離婚し、独身状態を続けている人が多い（特に女性）と推定できる。**若年者の離婚理由で多いのは、未婚化と同じく、経済的不安定である。男性の収入が十分でない場合、結婚しているよりも、離婚して子どもを連れて親元に戻るといふケースが増えている。

また、日本では、一方的な離婚はしにくい。例え一方が望んでも、もう一方が離婚を望まなければ、調停、裁判となり、5年くらいかかるのが通常である。特に、一方（通常男性）が妻以外の女性と結婚するために離婚を望む場合は、相当の慰謝料を払わな

ければ離婚に応じてもらえない。

経済的理由、世間体、子育てなどの理由から離婚に踏み切れないケースも多い。家庭内離婚と言われるように、夫婦仲は破綻しているのに、そのまま結婚生活を続けている人が多数存在している。**今後はむしろ、そのような中高年夫婦をどのように「リストラ」するかが課題となるであろう。**

終活の一環としての「熟年結婚」

私は、熟年結婚への関心が高まり、実際に増えているのは、社会全体で「終活」が必要になったからだと考えている。

2008年、「婚活」という言葉を私が作り出して以降、様々な「〇活」という言葉が作られるようになった。それは、「就活」を始めとして、昭和の時代には簡単にできていたことが、「努力」しなければ手に入らなくなっているからである。昭和の時代には、就職、結婚は、だれでも簡単にできるものであった。だから「就活」という言葉もなかった。しかし、平成に入ってから、就職も結婚も、努力しなければ実現できないものになったのである。

終末活動、いわゆる「終活」も同じである。昭和の時代では、自分の老後生活は、努力も、考えることも、不要と思われていた。ほとんどの人が結婚し子どもがいた。自分の老後は、配偶者や息子夫婦がいて、介護状態になれば配偶者か子ども夫婦が世話し



>>> 熟年結婚に見る人生100年時代



てくれ、亡くなった時も家族がいていねいにお葬式をしてくれるはずと信じて、高齢期の生活を送ることができた。

しかし、みんなが若い頃に結婚し、離婚せずに、子どもを持つて老後を

向かえる時代は終わった。今の若者

(概ね40歳未満)の4分の1は生涯未婚、4分の1は生涯に1度は離婚を経験する時代に入った。例えば息子が結婚しても同居してくれるとは限らず、また、子どもが未婚のまま同居し続けるケースも増えてきた。標準的と言われた老後を送ることができる人は、徐々に減少している。

「終活」とは、高齢者の生活状況が多様になり、予測できなくなる中で、老後を乗り切るために、オーダーメイドの老後生活を自ら努力して作り出す試みと考えられる。

高齢結婚増加の社会的理由

実際に、一人暮らしの中高年独身者が増えている。前述の通り1990年頃は、中高年独身者の多くは死別者で、結婚した子どもがいて同居しているケースが多かった。今は、既婚の子どもがいたとしても別居して生活している可能性が高まっている。

一人で生活するのは、心理的に寂しいし、経済的にも非効率である。内閣府の調査で若年未婚女性が結婚したい理由で2番目に

多かったのが、「老後一人でいたくない」であったのが印象的である(内閣府『結婚・家族形成に関する調査報告書』2011年)。老後、一緒に住む人が欲しいという欲求が高まるのも頷ける。

また、恋愛結婚の世代が高齢に達しているのも影響している。冒頭で述べたように、1965年では見合い結婚が半数を占めていた。今の75歳以上の半数以上の人は恋愛を経験せずに結婚したわけである。しかし、現在の70歳以下の人は、ほぼ恋愛結婚を経験した世代である。若い頃の恋愛をもう一度したいと考える人が増えていても、おかしくはない。

更に、世間的偏見が少なくなった影響もあるだろう。熟年結婚が珍しかった時代には、奇異な目で見られることもあった。周囲から「いい歳をして…」と言われることもあったろうが、実際に周りで熟年結婚が増えてくると、偏見は徐々になくなっていくと思われる。

結婚したい未婚者の増大に伴って、いわゆる「婚活業者」が増えているが、中には、中高年の婚活に特化した結婚情報サービスも増えている。

少し考えなくてはならないのが、熟年結婚を希望する理由の男女差である。「一人で生活するのは寂しいから」というのが第1の理由であることは、若い人と同じである。しかし、結婚情報サービス業の人に聞くと、高齢になっても、男性は家事や世話してく

れる女性を求め、女性は経済的安定を男性に求める傾向が強いと言う。伝統的な性別役割分業に沿った、夫婦の形成を求める中高年がまだまだ多いということである。

死別男性はともかく、未婚、離別男性の経済力はそれほど高くない。だから、伝統的な夫婦のあり方を目指す人が多い限り、熟年結婚の数は頭打ちに達するのではないだろうか。

よりよい老後生活のために

では、よりよい老後生活を送るために、独身中高年はどのような心構えでいればよいであろうか。

冒頭の「新婚さんいらっしゃい」に最高齢で出場した女性のケースを見てみよう。彼女は東京で経済的に裕福な生活を送っていたという。でも、自然が多い土地で暮らしたいと、これから楽しい人生を送るために、80代で新しい生活にチャレンジしたのである。彼女は125歳まで夫婦助け合って生きていることが目標だという。たいへん幸せそうな顔をしていた。

寿命が延び、人生100年時代と言われている。高齢になって初めて、経済的な問題を考えずに、恋愛を楽しめる条件が整うということもあるだろう。終活の一つの選択肢として、新しい形の生活のために「結婚」を考えることは、高齢社会の中で必要なことと違いない。